

# コミュニティの中で

## (1)

藤 信子

望月の提唱した対人援助の3つの機能のうち、**援護 (advocacy)** について考える時、コミュニティの中で、精神病への理解を深めるにはどのような関係を作れるのだろうか、と考えてみようと思う。コミュニティの中でという言い方は、私自身いろいろなコミュニティに属しているので、ちょっとわかりづらい言い方に聞こえるかもしれない。言い換えれば、大学という資源にいる人間が、地域社会の他の資源で、関係を作るというイメージである。

上記のようなコミュニティでの活動に関しては、立命館大学の心理教育相談センターの実習で、10年以上にわたりデイケアセンターに出かけて、高齢者と交流したことは、以前に書いた。そこでここでは、コミュニティ活動の関係者との接点について思い返してみようと思う。10年以上前になるが、京都市

のA区の「A区に暮らす、精神に障害のある人たちを地域ぐるみで応援し、社会参加や社会復帰ができるようにと設立された」ネットワークで、講演をしたことがある。これはA区の作業所に勤務する応用人間科学研究科の修了生のPSWのBさんの紹介で、「妄想」に関する話をして欲しい、ということだった。思えば立命館の応用人間科学研究科（当時）にいた時は、社会人の大学院生からのこのようなコミュニティの資源を紹介されることがあった。このような社会人の大学院生から受けるビビッドな知識には学ぶことが多かった。

その頃、看護大学の学生に精神科看護の1コマで、チームで働く心理士について話していた英国のガレティとヘムズレイ（1994/2006）の「妄想はどのようにして立ち上がるのか」をもとにして話すことにした。

妄想は、普通の思考とは全くかけ離れた異常な思考であり、他の人には理解しがたいものだと考えている看護学生を見ていて、コミュニティの人も、そのように考えている可能性があるだろうと思ったからである。そこでガレティ達の「ビーズ玉課題」を実際に体験することを通して、妄想は理解できない異常な思考ではなく、私たちの体験の延長線上にある思考だということを考えてもらおうと思った。

まず、妄想を持つことは、こころの安定を得ようとする働きであることを説明する。その後「ビーズ玉課題」を体験する。

「ビーズ玉課題」

それぞれビーズ玉が 100 個ずつ入った 2 つの瓶があります（絵を提示）

A の瓶：85 個の赤、15 個の緑のビーズ玉

B の瓶：85 個の緑、15 個の赤のビーズ玉

絵を見せた後で、ついたてで隠し、ビーズ玉を 1 個ずつ取り出し、参加者に A あるいは

B のどちらかの瓶から取り出したと考えるかを聞く。大体 3 個目くらいから、A あるいは

B の瓶だという声上がるが、5-6 個目になってもまだ慎重に考えている人もいる。結果は、「参加者が A あるいは B を決定するのは、何個目のビーズ玉を取り出した時か」

（取り出し個数）を見る。

ガレティ達の結果では、妄想を持った人たち：1.22 個（これは最初のビーズ玉と 1.22 個、合計 2.22 個を見て、A か B を決定した

ということ）。健全な人達：2.60 個。これによると妄想を持った人たちは、決定までの「取り出し個数」が少ない。健全な人たちに比べると半数以下である。ほとんどの患者は、2 個目のビーズ玉を見た時点で、どちらかを決定してしまったということで、性急な判断をしていると言える。この現象を「結論へと性急に飛躍してしまう傾向」とガレティ達は名付けた。この「結論へと性急に飛躍する思考」は、不安が強いときには、妄想を持った人ではなくても、多くの人が体験している「幽霊の正体見たり枯れ尾花」とかの説明をすると分かってもらいやすい。

妄想に関しては、主催者から参加者に地域の長寿クラブの方とかもおられるので、高齢者の妄想についても話すようにとのことだったので、以下のような特徴があることを話した。高齢者の妄想は、背景に喪失・自分の役割、権利、財産などを失う危機感があることが多いようである。

## 例)

**嫉妬妄想**：自分自身に目を向けてほしい、

見捨てないで欲しいという不安感の存在、相手への執拗なしがみつく気持ちがこのような妄想となって表現される。

**物とられ妄想**：認知症において記憶障害に

よって物を置いた場所を忘れることで、誰かに物を盗られたと信じ込む妄想。認知障害のない場合もある。近所に触れ回った

り、警察に届けるなどの行動を伴うこともある。その場合、犯人は家人、ヘルパーや近隣の人などの身近な対象に向けられることが多い。

**人物誤認：**夫はこんな人ではない、もっと若い、夫を探しに行かなければ・・・と出かける行動など。

このような例を話すと、参加者の高齢の方は「えーそういうことが起こるんか」「ちょっと大変やな」と自分や家族、知り合いなどをイメージされ、周りの人と話される。ビーズ玉課題に関しては、講義が終わった後に、「私は、確かに結論へと性急に飛躍する思考があるんです」と、自分のこととして話し始める方もいて、参加者の体験を考える場にもなったかと思出す。

妄想から教えられることは、・心配、不安を受け止めてもらえる関係を持つこと、・日常のいくつかの楽しみがあること、などが大事だと思っていることも話した。

このネットワークには、A区の医療関係、公共施設、社会福祉協議会、民生児童委員会、地域女性会、訪問看護ステーション、精神障害者作業所などが構成団体となっている

そうだ。講演会が開催されたのが、平日の午後だったので、私の印象では、参加者は作業所に通所している方、民生委員、女性会の方々などが多かったようだ。今思えば、こういう講演を契機に、もう少し少人数でよいかから、「心の健康」について、自分のこと、家族のことだけでなく、皆で少しずつ話し合える機会があったら良いと思う。既に実施しているところもあるかもしれないが、障がいの当事者、家族だけでなく、近隣住民とコミュニティの中で、話すことで理解しあえることがあるのではないだろうか、と思い返している。それが「心配・不安を受け止めてもらえる関係」を作る端緒になるのだと思う。

#### 文献：

Garety, P.A. and Hemsley, D.(1994)

Delusions: investigations into the psychology of delusional reasoning.

Oxford University Press(P.ガレティ、

D. ヘムズレイ (1994) 丹野義彦監訳

(2006) 妄想はどのように立ち上がるの

か. ミネルヴァ書房